みを行ってきた。移住者数の増加と併せて、ふるさと回帰支援センター2021年移住希望地域ランキング（セミナー参加者部門）では、第２位を記録した。また、移住専門誌「田舎暮らしの本」が毎年集計している2022年版第10回「住みたい田舎」ベストランキング（人口５万人以上20万人未満のまち）では、若者世代・単身者が住みたいまち部門にて西条市が第１位、子育て世代が住みたいまち・シニア世代が住みたいまちに、それぞれ今治市が１位を獲得するなど、全国的にも移住候補地として注目されるようになった。

次に、実際にどんな人たちが愛媛県へ移住したのか。愛媛県の移住者を３名紹介する。

波片 仁志さん（新居浜市）

波片さんは、小学校から高校まで新居浜市で過ごし、その後進学のため大阪へ。北海道の不動産会社へ就職したが、希望の仕事内容が叶わず、新居浜市へＵターンした。現在は就農し「はがた農園」を営む。当時、耕作放棄地だった畑をコツコツと開墾し、現在では約二町ほどに。ニンジンや大根、ジャガイモなど根菜類を育てている。活動は農作物作りにとどまらず、農園に研修生を受け入れるなど、人と人が行き来し、出会う場づくりを行っている。また、注目したいのは出荷先のひとつである学校給食のプロジェクトだ。質の良い野菜を給食に使ってもらうため、はがた農園の野菜で漬物を作って販売し、その利益を全額、学校給食に使うニンジンの資金にしようというチャレンジをしている。

波片さんは、「一度は都会に出ていっていいけん、いつかは帰ってきて」と願っている。地域を支えていくのは今暮らしている子どもたちであり、彼らが地域に誇りを持ち、そして自らが住みよいまちを作っていく。このように子どもたちが未来に希望を持てる地域にしなければならない。それにより、Ｕターン移住者は、地域の可能性のキーとなっていくのである。

市毛 友一郎さん（内子町）

東京出身の市毛さんは、著名なアーティストのスタジオを退職したのち、奥さんと２人で世界一周＋国内周遊の旅に出る。旅の途中で出会った南予の風景に魅せられ、愛媛県への移住を決意した。松野町を経て、現在は内子町小田地区（寺村）へ拠点を移した。移住後は、メルカドデザインという屋号でフリーランスのデザイナーとして活動し、主に地元の広報ツールや自治体の観光パンフレットなどを手がけている。地方のクリエイティ